九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本におけるアルフォンス・ドーデの移入と受容 : その評価の変遷

山根, 祥子

https://doi.org/10.15017/1500474

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名　：山根　祥子

論 文 名　：日本におけるアルフォンス・ドーデの移入と受容―その評価の変遷―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は日本におけるアルフォンス・ドーデの移入と受容について考察したものである。アルフォンス・ドーデの先行研究としては富田仁を始めとする比較文学的受容研究及び資料があるが、そこではあまり触れられていない大正・昭和期の受容を補いながらその評価の変遷の検証を試みた。

まず第 1 章では、ドーデ文学の受容のキーワードとしてこれまでよく語られてきた愛国心や自然主義といった側面からではなく、ドーデの作品に表現される、失われつつあるものに対するノスタルジーへの共感による受容という側面から考察する。第 1 節でノスタルジーとは何なのかという定義づけをし、第 2 節でドーデの抱くノスタルジーに潜むのは彼の幼少期の故郷喪失体験があることをドーデの自伝的小説とも言われる『プチ・ショーズ』を中心に検証する。第 3 節ではドーデが自分のノスタルジーを発想源として思い描いた理想郷を舞台とした小説が日本の文人・知識人たちの琴線に触れた背景には明治期の日本にそれを受け容れる土壌があった可能性を考え、明治 20 年代から 30 年代の「田園文学」ブームに着目し、ゴールドスミスの田園詩 *The Deserted Village*、宮崎湖処子の『帰省』や、徳富蘇峰の自伝、北村透谷の故郷に関する「三日幻境」などの言説を傍証しながら、ドーデ文学受容を「田園文学」ブームの視点から論じる。そして第 4 節でドーデの創るユートピアが彼の生れ故郷である南フランス独特の風土によって生み出されたことを確認する。

次に第 2 章では、ドーデ像の形成について考察する。第 1 節はフランス本国でのドーデのイメージを風刺画家ジルの描いた当時のカリカチュアやドーデと同時代作家であるゴンクールの日記などから読みとる。第 2 節では小谷幸雄の「鷗外とドーデ　－資料的エスキス－」や神田孝夫の「鷗外初期の文芸批評」などの先行研究を出発点とし、エミール・ゾラの自然主義を否定したドイツの批評家ゴットシャルの評論 *Literarische Todtenklänge und Lebensfragen* の中のドーデ像を明確にし、そのゴットシャルのドーデ論に影響された森鷗外の「小説論」「今の諸家の小説論を読みて」のドーデ像を探る。第 3 節では明治・大正期の文芸時評の中に書かれたドーデに関する記事やドーデの名を引き合いに出して比較された江見水蔭の「炭焼の煙」や水野葉舟の「武島町の女」や鈴木三重吉の「人形」などの例を示しながら鷗外以降の明治・大正期のドーデ像の形成を明らかにする。第 4 節では昭和期に入るとドーデ作品は長篇小説よりも短篇小説の翻訳が増加し、また読者が大人から子どもへとシフトチェンジされていく様を資料から読み取り、国語の教科書教材としてドーデのイマージュの形成過程を追う。

最後に第 3 章では、日本におけるドーデ作品の受容について考察している。第 1 節ではドーデの長篇小説の内『プチ・ショーズ』『タルタラン三部作』『ジャック』『ナバブ』『サフォー』などの翻訳が試みられた作品と、ドーデの出世作とも言える長編小説 *Fromont jeune et Risler aîné* の他、*Numa Roumestan* や *L'Évangéliste* や *L'Immortel* など未邦訳の作品を比較し、その受容の変化を見て行く。第 2 節では長篇に比べてよく読まれているドーデの短篇小説が子ども向けへとシフトチェンジしていく過程で翻訳ではなく再話、つまりテクストに意図的と思われる添加や省略が行われていることを、大人向けに翻訳された羝夢生・紅葉山人版、天絃版、桜田佐版と鈴木三重吉の翻訳

と比較することによって明らかにする。第 3 節ではドーデ作品のうち最も教科書に掲載された『最後の授業』について、府川源一郎の日本における *La Dernière classe*『最後の授業』の受容についての先行研究を整理した上で補足修正を加え、この短篇小説が小中学校の国語の教科書テクストとして重宝されてきたという事実に加えて、国語だけでなく英語のテクストとしても使用されてきたことを提示し、これらの教科書テクストをフランス語の原文テクストと比較する。第 4 節では、『最後の授業』以外にも教科書テクストとして採用されたドーデの短篇小説、「赤しゃこのおののき」「売り家」「風車小屋」「コルニーユ親方の秘密」「星」を取り上げ、教科書指導要領などの資料も踏まえつつ、それらのテクストが教科書教材として使用された理由の解明を試みる。そして、ドーデが英語教材から国語教材を経て道徳教材として扱われているという現代日本におけるドーデの再評価を支える考え方について検討する。

本論は日本におけるドーデの移入と受容に関してドーデの評価の変遷を辿りながら、「愛国心」や「民族主義」など数あるドーデ文学の特質の中でも喪失によって生じるノスタルジーに着目して論じ、明治・大正・昭和という時代の流れの中で、大人の読み物からその対象が「子ども」へとシフトチェンジしてしまい、忘れられた作家となってしまったドーデに再びスポットを当てようという試みである。

※ 2,000 字程度にまとめること　　（比甲様式６）